

知的好奇心を高める授業と

気付かせる指導で志望に挑む生徒を育成

広島県立広島中学・高校は、毎年、国公立大に数多くの生徒が合格する県内屈指の進学校だ。夢の実現のために自ら学びに向かう生徒を育むため、知的好奇心を高める授業づくりに加え、客観的データに基づき、生徒自らが気付き、行動するための支援を実践している。

潜在能力の高い生徒が夢の実現へと自ら学ぶように

創立10年目を迎える広島県立広島中学・高校は、併設型の公立中高一貫教育校だ。学力向上や進路指導のノウハウを、県下の公立校に波及させる使命を担うリーディング・スクールでもある。進路指導主事の小笠原成章先生は次のように述べる。「教わったことを素直に受け止めて覚えるだけではなく、主体的に課題を発見し、解決して、自分を含む社会を豊かに出来る生徒を育てたいと思っています。本校には元々、考

えることや表現することが好きな、力のある生徒が多くいます。だからこそ、生徒一人ひとりに応じた適切な指導により、個々の力を更に伸ばし、夢の実現に向けて自ら学べるような、自律的な学習者を育てたいと考えています」

高倍率の中学校入試を勝ち抜いてきた潜在能力の高い生徒が集まる同校だが、中学校の入試は学力検査ではなく、適性検査で行うこともあり、入学時の教科学力は多様だ。更に、学年によって学力層の分布も大きく異なるといふ。そのため、毎年、一律の指導ではなく、各学年の課題に

応じた指導の工夫が必要とされる。

学び方の面では、中学校から高校への転換がうまく出来ていない生徒もいるのではないかと、1学年担任の福本洋二先生は指摘する。

「中学校と高校では学習方法に違いがあります。本校に入学してくる生徒は、意欲や表現力などの面で優れた生徒が多いのですが、それに頼って基本をあいまいにすると学力は伸びません。『高校生にする』指導が必要です」

潜在能力は高いものの、生徒間の学力差があり、学年ごとの個性もさまざま。このような中、生徒一人ひとりを更に高めへと伸ばそうとする同校は、どのような指導を行っているのか。

広島県立広島中学・高校

◎2004（平成16）年、県下初の併設型県立中高一貫教育校として開校。校訓を「高い知性・豊かな感性・強い意志」と定め、グローバル化時代に活躍できる人材育成を目指している。

◎形態/全日制、普通科、共学

◎生徒数/1学年約240人

◎13年度入試合格実績（現浪計）

国公立大には東京大、京都大、広島大などに176人が合格。私立大には早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ466人が合格。

◎住所/広島県東広島市高屋町中島31-7

◎電話/082149110270

◎URL/<http://www.hoyuko.hiroshima-c.ed.jp/>



福本洋二 ふくもと・よっじ
広島県立広島中学・高校
教職歴23年。同校赴任歴1年目。1学年担任。「可能性を信じ、試行錯誤し、共に努力をする」



松本雅樹 まつもと・まさき
広島県立広島中学・高校
教職歴28年。同校赴任歴10年目。3学年主任。「どんな時も生徒と学年団の成熟・成長を信じる」



森棟尚 もりむね・たかし
広島県立広島中学・高校
教職歴25年。同校赴任歴5年目。2学年主任。「生命の尊さとはかなさを伝える」



前田秀幸 まえだ・ひでゆき
広島県立広島中学・高校
教職歴26年。同校赴任歴8年目。1学年主任。「生徒の目本となるために、自分も挑戦し続けたい」



小笠原成章 おがさほら・しげあき
広島県立広島中学・高校
教職歴24年。同校赴任歴4年目。進路指導主事。「物事の本質的な成り立ちを生徒と一緒に探りたい」



三谷弘子 みたに・ひろこ
広島県立広島中学・高校
教職歴29年。同校赴任歴5年目。指導教諭・教務部。「笑顔と感謝。そして、生徒の可能性は無量大」

ポイント 1

知的好奇心を刺激し、
知識と思考を深める授業

高い水準の授業をつくる
P D C A サイクル

生徒が主体的に学びに向かうために教師が最も意識しているのが、知的好奇心を刺激する授業の実践だ。指導教諭の三谷弘子先生は、「本校の生徒の多くは、基本的な学習習慣や学び方は身に付いています。更に、主体的な学びに向かわせるためには、『テストに出るから覚えなさい』という指導ではなく、生徒が面白いと感じる授業をすること、つまり知的好奇心を喚起する内容を提示し、学びの質を高めていくことが必要だと考えています」と語る。

こうした授業を行うため、同校では全教師の授業公開や「授業改善理論研修会」を行い、組織的に指導力向上を図っている。また、生徒への授業満足度調査を7月、12月の年2回実施。聞き取り調査も行うこの調

査は、授業を共に作り上げていく

上での重要な参考資料と位置付けられている。結果は教務部が分析し、その内容を授業改善理論研修会で公表した後、各教科会に分かれて課題の改善策を話し合う。例えば、数学では、他教科に比べて「話し合い活動が少ない」という生徒の声が多かったため、1年生の課題学習の時間に、生徒が意見を発表し合うグループ活動を取り入れた。1学年主任で数学担当の前田秀幸先生は、「かつてのように、黒板を使って難しい問題の効率的な解き方を教えるだけでは、生徒は満足しません。私たちは教師が意識を変えようとするのが大切です」と述べる。

また、経験の浅い教師の授業が生徒から低い評価を受けた場合は、教科主任と面談を行い、改善策を話し合う。更に、同じ担当教科の教師が授業を参観してアドバイスをするなど、さまざまな支援体制がとられる。教科や学年がチームとなって、学年全体、教科全体で指導力を向上させようとする意識が質の高い授業づく

りの土台になっている。

知的好奇心の根幹にある
基礎・基本の充実

具体的にはどのような授業なのか。2学年主任で生物担当の森棟尚先生は、学力層に応じて発問の仕方を変えながら知識と思考力を育むと話す。「例えば、浸透圧を教える際、生物が苦手な生徒にはまず浸透圧について説明し、『台風の後には稲が枯れるのは浸透圧の知識で説明できる』と話して、実生活との結び付きを実感させます。一方、生物が得意な生徒には、台風の後には稲が枯れるのはなぜかをまず問います。教師は答えを言わず、生徒から出てきたいろいろな意見が、共に考える過程を通して、彼らの中で知識としてつながっていくような展開を意識します」

三谷先生は、基礎・基本の重要性についても強調する。

「近年、『受験勉強が面白い』と言う生徒が増えてきました。努力を地道に続け、基礎的な知識が身に付いている生徒ほど、そうした傾向が見

られます。基礎・基本の知識が定着し、思考力や判断力が身に付いてくることによって、頭の中でそれらが体系的に結び付き、授業を面白いと感じるようになるからでしょう」

更に、3学年主任の松本雅樹先生も次のように続ける。

「担当教科の物理の授業では、例えば、生徒に電車をイメージしたパントマイムをさせ、慣性を体感させて興味・関心を喚起するような工夫をしています。ただし、そうした事象の根拠は、全て教科書に載っています。生徒の好奇心を刺激することは大切ですが、それは表面的な面白さではありません。教科書に書かれている体系的な知識と結び付けて学びを広げることが出来る生徒たちだからこそ、知的好奇心を高めることが主体的な学びにつながっていくのだと思います」

ポイント 2

客観的なデータに基づく
個々の課題に応じた指導

同じ悩みを持つ生徒を
高め合う仲間にする

同校がもう1つ重視するのは、客観的なデータに基づく生徒把握とそれに応じた指導だ。生徒把握の重要なツールの1つは模試データ。同校では、志望校、模試の結果、校内順位などをA4判1枚に凝縮した「個人カルテ」を生徒1人ずつ作成し、生徒とも共有し、面談や志望校検討会の資料などとして活用している。

集団の良さも最大限に活用する。全学年で志望校別の集会を行う他、現2年生では1年生時にスタディサポートの結果を用いた「領域別集会」を実施した。生徒を学力と学習習慣のバランスに応じて4領域に分け(図1)、学習しているが成績が伸び悩む生徒には、成果が出るには時間が掛かることと共に、効果的な自宅学習の方法を伝えるなど、各領域の課題に応じてアドバイスをした。

「現2年生は1年生の時から学力の二極化が課題でした。日頃からクラス担任や教科担任を通じて学習への意識付けをしたところ、生徒に『自分の課題に応じた今後の具体的な指針が欲しい』という思いが生じていました。そこで、同じ悩みを持つ仲間を集め、学力と学習習慣の状況に

図1 学力と学習習慣に応じた4領域の特徴と、生徒へのアドバイス方針

<p>Type1 学力◎ 学習▲</p> <p>成績はよいが学習習慣が身に付いていない。今後、成績が下降する可能性あり</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 通塾状況、部活状況の確認 2 授業態度・理解度の確認 3 学習習慣の見直し 	<p>Type3 学力◎ 学習◎</p> <p>しっかりとした学習スタイルが好成绩につながっている</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 志望校や進路目標の確認 2 進路目標の引き上げ 3 知的好奇心をくすぐる
<p>Type2 学力▲ 学習▲</p> <p>まず学習時間の確保。他の学習阻害要因をチェックして、成績向上を目指したい</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 部活状況の確認 2 自宅学習状況の確認。無駄をなくす 3 学校生活以外の悩み？ 	<p>Type4 学力▲ 学習◎</p> <p>学習習慣は身に付いているが成績が伸び悩んでいる。自信を失わせないように指導したい</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 現状否定をしない。時間が掛かることを教示 2 自宅学習内容の無駄と重複を確認

*学校資料を基に編集部で作成

ようになっている。

模試デジを統括する福本先生は、「模試後に、最も多くの生徒が間違えた部分を中心に事後課題を出すなどの取り組みは、これからも大事にしていきます。これに加えて模試デジも活用することによって、生徒は個々の課題に応じた復習に自律的に

苦手分野の克服に結び付けてきたが、今後は事前指導にも力を入れる考えだ。2013年度にベネッセの「進研模試デジタルサービス(模試デジ)」を導入し、生徒が自らパソコン上で目標得点の設定から復習までを自律的に行えるシステムを整えた。受験前には、意識を高めるため、志望校の登録とそれに基づいた目標点を設定させた。受験後は自己採点を行わせ、自分の課題を意識した復習に取り組ませている。教師は、生徒の志望校、目標点、自己採点の結果や復習の取り組み状況を確認でき、生徒の様子に応じた指導が行える

取り組めるので、復習効果が更に高まると期待しています」と語る。

ポイント 3

面談を通じて生徒の自立を支援

足りないことは何か 生徒に自ら気付かせる

個別に生徒と向き合う面談も、同校の指導に欠かせない。面談はほぼ毎月、学年で決めたテーマで生徒全員に行う他、どの教師も生徒の悩みの声を聞く面談を日常的に行う。同校の面談は「褒めて、励ます」が基本。「模試の後の面談では、たとえ成績が悪くても褒めるところを探してもらおう、先生方をお願いしています。本校の生徒は、褒められれば、かえって自分に足りないところを探し、何とかしたいと考えるようになります。教師が生徒の弱点を教えるのは簡単ですが、生徒が自ら気付き、口にするので、次の行動につながっていくのです」(松本先生)

3年生では教科担任による面談も

行う。3年生4月は成績が伸び悩む生徒、5、10月は難関大志望者、7月は地方の国公立大志望者を対象とする。生徒は自分で必要だと考える教科担任に面談を申し込み、課題を相談する。教科担任にとっては、担当教科以外の様子が分かるメリットもあると前田先生は語る。

「個人カルテを見ると他教科の様子が分かり、教科バランスの悪い生徒には『数学はよいから英語を勉強しなさい』というように、全体のバランスを考えた助言も出来ます」

学習面での的確な指導と、いろいろな先生から見守られているという実感が、生徒に受験に向かう勇気を与えるのである。

具体的な指針と励ましで 第1志望を貫かせる

3年生の三者面談前には、「志望校検討会議」と「進路診断会議」を行い、全生徒の出願の妥当性と志望実現の手立てを教師間で共有する。

志望校検討会議では、学年会の教師と進路指導主事が生徒の志望と成

績を照らし合わせ、進路指導方針を検討する。進路診断会議では、学年

会と進路指導部、管理職と教科担任が一堂に会し、教科の立場から志望実現に必要な支援方法を検討する。

クラス担任はそこで話し合った結果を持って三者面談に臨み、生徒と保護者に具体的な学習方法や志望実現の可能性を伝える。3年生の三者面談は1学期末、2学期末、センター試験後の計3回あるが、全てこのプロセスで志望校の検討が行われる。

出願まではあくまで第1志望を目指させると、小笠原先生は言う。「合格可能性を考えるだけでは単なる判定会議になってしまいます。教科担任は志望実現のための学習方法を伝え、担任はそれを受けて、生徒が希望を持って受験勉強に向かえるような声掛けをしています」

教師の励ましに背中を押され、主体的に学びに向かい始める生徒は多い(図2)。現3年生では早朝の自学自習が盛んで、休日も教室を開放して自習を奨励。「受験勉強を楽しむ会」を開催したり、生徒が作成し

図2 卒業生の体験記

広島中学・高校で過ごした6年間、私は折にふれてこの学校に来てよかったと思っていました。それは、この学校が私をさまざまな意味で大きく成長させてくれたからです。1つには、学習面での成長があります。この学校でさまざまな授業を受けるうちに、私は学校での勉強を単なる進路実現の手段としてではなく、学問という大きなものに近付いていくはじめての一步として捉え、純粋に楽しむようになりました。この勉強の捉え方の変化は、県広の個性豊かな、それぞれの教科への情熱を持たれている先生方の授業を受けられたからこそ起きたのだと思います。(後略)

(東京大文科三類1年生の体験談より)

た模範解答を配布し生徒間で共有したりする互助活動も活発だ。今後の課題は東京大・京大などの最難関大の受験者を増やすことだ。

「後期日程にも粘り強く挑戦する生徒が多いのは本校の特徴ですが、浪人してでも第1志望校を貫くというくらいのはの気概を持つ生徒を更に増やしたい。本校の校訓でもある『強い意志』で志を遂げようとする姿勢を育み、生徒が自信を持って挑戦できるような支援体制をより充実させていきたいと思えます」(前田先生)